

編集後記

雑誌の発行が遅れましたことを、まず、お詫び申し上げます。本機関誌は、これまで八月に発行することを原則としてきましたが、今回は、二月以上も遅くなってしまいました。原因は、原稿が揃わず、編集作業が長引いてしまったことにあります。特に、早期に原稿をお寄せいただいた皆様と花書院の皆様には深くお詫び申し上げます。なぜ、原稿が揃わなかったか、ということを考えますと、いろいろと考えるべき問題が見えてきます。編集長・事務局長としての私の反省は、もっと必死に投稿の呼びかけをするべきであった、ということですが、もちろん（責任逃れをするつもりはありませんが）、編集者の「熱意」だけが問題ではないでしょう。執筆者の一人としても、反省すべき点は多々あります。

最近、つくづく思うのは、「血でもって書く」ということについてです。いささか古くさい言葉だと思われるかも知れませんが、ニーチェは、こう言っています。「すべての書かれたものの中で、わたしは、人が自分の血でもって書いているものだけを、愛する。血でもって書け。そうすれば、きみは、血が精神であることを経験するであろう」（『ツアラトウストラ』吉沢伝三郎訳）。もちろん「血でもって書く」ということだけで良書が生まれるというわけではないでしょう。しかし、これを書かずにおくものか、というような情念が感じられる言葉でなければ、読みたいとも書きたいと

も思わない。「血でもって書け」という呼びかけは、少しも古くなつてはいないのだと思います。

北朝鮮の核開発によつて、また、新たな緊張が生まれています。ただ、忘れてならないのは、ある出来事に目を奪われているとき、別の何かは見えなくなつてしまつていることです。新たな緊張は、何かを露わにしつつ、別の何かを隠してしまします。例えば、北朝鮮が核開発をすることの不当性が問われているとき、他の国が核を保有していることの不当性は問われなくなつてしまします。隠されたものをとらえるには、奪われた目を取戻すことが必要です。

新たな緊張に対して、本誌が、「血でもって書く」という緊張感を持ちえているのか、ご意見、ご感想等、お寄せいただければ幸いです。（N）

原爆文学研究 5

二〇〇六年一〇月三十一日発行

編集 原爆文学研究会

八〇一八六〇

福岡市中央区六本松四―二―一

九州大学大学院比較社会文化研究院

波瀾剛研究室気付

発行 (有)花書院

八〇一〇一三

福岡市中央区白金二一九一六

TEL 〇五三五六〇三七

FAX 〇五三五四四二一

定価 一一〇〇円(本体 一四三円)

◇書店にない場合は「地方小出版流通センター扱い」とご指定の上、書店にご注文下さい。

◇継続購読は、花書院「原爆文学研究係」にお申し込み下さい。送料は無料となります。